# 第34回日本心血管インターベンション治療学会；CVIT2026

**DCBを用いたEVTにおけるレーザ血流計測定の評価**

**①今回の学会・研修の内容**

CVITは日本最大級の心血管インターベンション領域の学術集会であり、毎年国内外から多数の専門医・医療従事者が参加します。医師の働き方改革が進む中、臨床工学技士をはじめメディカルスタッフの循環器領域における役割も変化してきています。

全国のメディカルスタッフによる研究発表を聴講し、多くの知見を得ることができました。

他施設の取り組みも学ぶことができ、大変有意義な学会となりました。

**②今回の学会に参加した感想や印象に残った発表**

CVIT2026にて「DCBを用いたEVTにおけるレーザ血流計測定の評価」に関する発表を行いました。

一緒にデータ収集を行ってくれたCEのみんなや、ご指導いただいた循環器内科医師のご協力のおかげで、無事に発表を終えることができました。

また、メディカルスタッフ向けのVRビデオライブに参加し、VRゴーグルを装着して他施設のカテーテル検査を360度の視点で体験できる貴重な機会を得ました。

今回の学会への参加を通して、、カテーテル業務へのモチベーションをさらに高めることが出来ました。

今後も自己研鑽を重ね、患者さんにより良い医療を提供し、医療へ貢献できる臨床工学技士を目指して努力していきたいと改めて実感した学会となりました。

三郷中央総合病院　係長　坂巻　裕介　東海大学出身











# DCBを用いたEVTにおけるレーザ血流計測定の評価

## Ⅰ.研究目的

EVTにおいてDCBは通常バルーン治療と比較して再発率を低下させ、良好な遠隔期成績が報告されている。一方でDCB治療後に一過性の末梢血流低下を来す症例も経験され、末梢循環への影響は充分に検討されていない。本研究ではDCB治療前後の下肢血流動態をLDFを用いて評価したため報告する。

## Ⅱ.研究方法

2025年3月から10月までSFA狭窄に対してDCB治療を行った18名を対象に治療前後及び術翌日に血流量を測定した。治療後と術翌日の血流量が共に増加した症例をup群、治療後もしくは術翌日のどちらか一方において血流量が減少した症例をdown群とし、血流変化量、ABI、バルーン薬剤量を比較した。

## Ⅲ.結果

up群は12名、down群は6名であった。Up群の治療後血流変化量の中央値は[四分位範囲]は1.9[1.4-2.3]、down群は0.65[0.38-0.81]とup群の変化量が有意に大きかった(p=0.001)。術翌日血流変化量はup群で1.57[1.23-2.10]、down群で1.05[0.76-1.24]とup群の変化量が有意に大きかった(p=0.025)。Up群のABI変化量は0.14[0.08-0.26]、down群は0.20[0.17-0.51]といずれも上昇し、変化量は両群で有意差は認めなかった(p=0.174)。up群の薬剤量は7733[5895-9596]μg、down群は10850[9008-11741]μgとup群で薬剤量は少ない傾向であった(p=0.111)。

## Ⅳ.考察

本研究では、DCB治療後に血流量低下を6例認めたが、いずれもの症例においてもABIは改善しており、現時点での臨床的意義は明らかではない。血流量低下群では薬剤量が多い傾向を認めたものの、薬剤量との直接的な関連性について慎重な解釈が必要である。

## Ⅴ.結論

LDFを用いることで、EVT前後における治療部位の末梢循環を簡便に評価できる可能性が示唆された。EVT前後の微小循環血流の変化が臨床予後に及ぼす影響については、今後さらなる検討が必要である。

## 引用文献

J Am Coll Cardiol. 2015;66:2329-2338